

北区の避難所開設訓練

『北野・曾根崎地域における避難所開設訓練』出務報告書

訓練日時：平成29年2月19日（日）午前10時00分～

訓練場所：天満中学校（北区神山町12-9）

小山 春海

2月19日は雨上がりの気持ちの良い天候に恵まれ、日当たりの良い所は暖かく感じました。

天満中学校体育館につくと館内は暗幕が閉じられ、カンテラで各コーナーを照明し、地域の人たちの発案で災害が深夜に起こったことにしたということでした。その中で地域の人たちの登録が行われ、準備が整ったところで照明を全体につけて、北野病院の看護師数名で外傷救急処置の説明に次いで、消防隊の方たちの心臓マッサージやAEDの使用方法など、実地の練習を器具を使って行われました。その後、段ボールによる簡易トイレなど作製され、体育館外で煙の体験も行われていました。医療の診療場所として体育館内にテントを張り、診察ベッドはエアーマットで作られ、血圧計、SPO2測定、聴診器も備えられていました。約2時間の訓練終了後、健康相談となり約10名の方の血圧測定、SPO2測定を行い、全員の写真撮影で全て

のスケジュールは終了いたしました。北野・曾根崎地区は、全体に住民は少ないながらも、設備連繋は良くとれているように思いました。

『北天満地域における避難所開設訓練』出務報告書

訓練日時：平成29年12月3日（日）午前10時00分～

訓練場所：もと北天満小学校（北区浪花町4-16）

富野 佳夫

重症者は病院へ搬送、軽症者は帰宅を指示する結果に至る訓練でありました。模擬患者の方を診察して上記のトリアージをしました。休日急病診療所とはほぼ同じ流れであると思えました。休日急病診療所では帰宅指示者に対しては原則1日分の処方しか出せず、翌日近医受診を指示します。災害の場合に近医が通常の機能を果たせない可能性（休診）も高く、避難所で2日以上の処方が必要になるのではないかと考えました。今回の訓練では医師は薬の説明はせず、また薬剤師の方もおられず、診察練習のみで治療練習なしとなってしまいました。

どれくらい薬剤の準備をすべきであるかまたできるのか、懸念されました。

大原 裕彦

東 田 明 博

平成29年12月3日に元北天満小学校の校庭で行われた訓練に参加させて頂きました。

昨年も参加しましたが、参加者に挨拶をして頂ける患者さんが前回より増えており、少しは地域に馴染めてきたのかと、嬉しく感じました。また校庭に素晴らしい芝生があり、その上を子供達が走り回っている姿を見ただけで、癒されました。

避難所開設訓練ですが、患者役の住民の方が病状のプラカードを付けて、避難所に来られ、トリアージを行う設定でした。来られた方々を診察し、病院に搬送が必要な方と、避難所にて対応する方に振り分けを行いました。訓練では問題無く行えましたが、実際はどうなるであろうかと不安になります。有事の際は、指示体制の乱れ、偽情報の氾濫が考えられます。そうなると、やはり、地域の役割分担（例えば、避難所の機能、用意されている物品の把握等）をしっかりと理解をし、出来る事を確実に行う事が、最善の策だと考えます。まずは、簡単なマニュアルを作り、訓練毎に、見直しをしていけば、良いのではないかと思考しております。

本会から会員4名、看護師1名が参加。地震発生後24時間後の避難所の設定。仮設救護所において、模擬患者約20数名の対応を行った。内容的には昨年とほぼ同様。発災後数日経過している設定であれば、薬剤師の参加が望まれる。

西 木 正 照

大規模災害時の救護所での救護活動に参加させて頂きました。

災害時の患者トリアージの難しさは、一見、軽症にみえる患者の急変であります。

今回の患者設定は、一見軽症にみえるが基礎疾患に糖尿病や膠原病など今後、重症化する可能性のある患者設定がなされており、ユニークでありました。

わたしの専門領域も糖尿病のため、通常、軽症にみえる災害発生時の怪我が思わぬ下肢切断や緊急人工透析に進展することがありますので、救護所に簡易血糖値測定器も備え付けていたきたいと思います。

北天満地域の災害時はもとより、常日ごろからの安心安全に

寄与できるように、当院もご協力させていただきたいと思いま
す。

この度は、ご出務させていただき、誠に有難うございました。

宮 本 眞由美

12月3日(日)北天満小学校で、北天満地域における避難所
開設訓練が行われた。

北天満地域は2100世帯、約4200人が暮らす地域で、
都会の真ん中で古くからの住宅とマンションが混在している。
今回は大規模災害が起きた時に300名ほどの受け入れを想定
しての訓練であった。医師会から、地域で開業している先生4
名と訪問看護ステーションから看護師1名で、25〜30名程度の
模擬患者を想定して対応にあたった。当日は12月に入り急に寒
くなったため、用意されていた血圧計では防寒用の上着を着用
していた人は血圧測定に手間がかかり、手首式もしくはマンシ
ェットを巻くタイプの血圧計が必要だと思った。また小児患者
もいたため小児用の血圧計の必要性も感じた。医師・看護師の
連携ではコミュニケーションの円滑さが、よりチームとしての
パワーを発揮できるものと実感した。幸いにも訪問看護師は地
域の先生と日頃より仕事上の連携ができているため、地域の災
害時には役立つのではないかと考える。



済生会中津病院の風景です